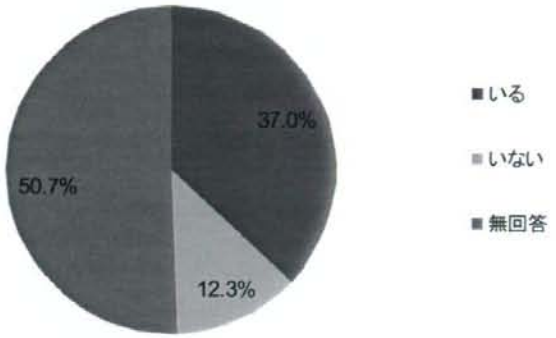
(10) 担当地区の高齢者で情報が得られにくい方の有無

担当地区の高齢者で情報が得られにくい方の有無をみると（図20）、「いる」と答えたものが27人（37.0%）、「いない」と答えたものが9人（12.3%）、「無回答」が37人（50.7%）で、全体の3分の1以上が「いる」と回答していた。

図20. 担当地区に情報が得られにくい高齢者の有無

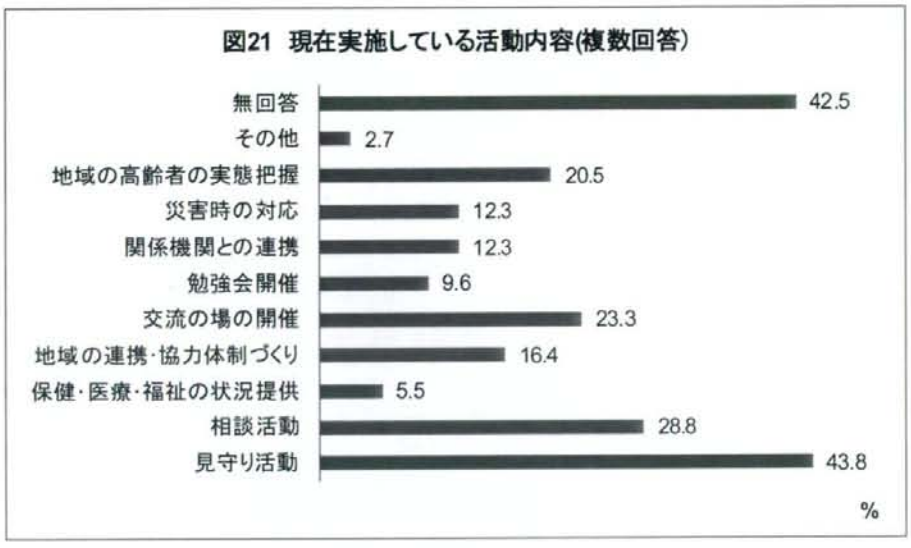


(11) 実行している活動内容

現在実施している活動の内容を回答してもらった（表18、図21）。見守り活動と回答した人が最も多く32人（43.8%）、次いで相談活動21人（28.8%）、交流の場の開催17人（23.3%）などがあげられた。

表18.現在実施している活動内容(複数回答)

項目	人数	%
見守り活動	32	43.8
相談活動	21	28.8
保健･医療･福祉の状況提供	4	5.5
地域の連携･協力体制づくり	12	16.4
交流の場の開催	17	23.3
勉強会開催	7	9.6
関係機関との連携	9	12.3
災害時の対応	9	12.3
地域の高齢者の実態把握	15	20.5
その他	2	2.7
無回答	31	42.5
合計	73	100.0



(12) 見守り活動についての意見

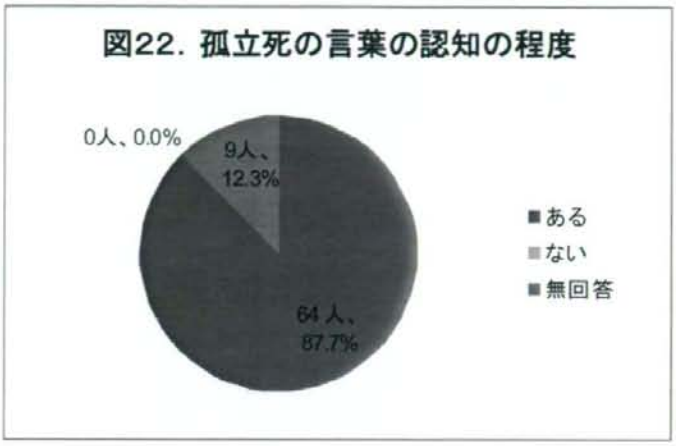
見守り活動について自由に回答していただいた内容を表19に示した。認知症高齢者に対する対処で困っているという意見と共に、民生委員との連携で見守りがうまくいった事例の記述があった。また、さりげなく支えていくことや、隣近所が協力し合うことの大切さなどと共に、行政から見守り対象者の名簿等の提供を希望する意見などが述べられていた。

表19. 見守り活動への意見
・ 本人は認知症の認識がなく独居であり、家族は遠方に住み、家族から見守りを兼ね関わりを持つように依頼されるが、本人は何も困っていないと言い、訪問を拒否される。
・ 高齢者虐待防止ネットワークづくりの中で、認知症の方の地域での見守りで、民生委員の方に自分の担当の認知症の利用者をお知らせして何かあった時、協力を得られるよう話をすることができた。
・ いきいき活動を通して、また食事会を通して見守り、直接訪問したりすることは遠慮している。
・ さりげなく話をして心を開いてもらう。
・ 見守りとなると、私は勿論、やはりご近所の方々の見守りも大切だと・・・。みんなで力を合わせるようやっていければと思います。
・ 見守り対象者の把握が出来ていないので見守りが必要な対象者の名簿等の行政からの情報が欲しい。
・ 子どもの見守り、高齢者の時間。

4） 孤立死の状況

(1) 孤立死の言葉の認知の程度

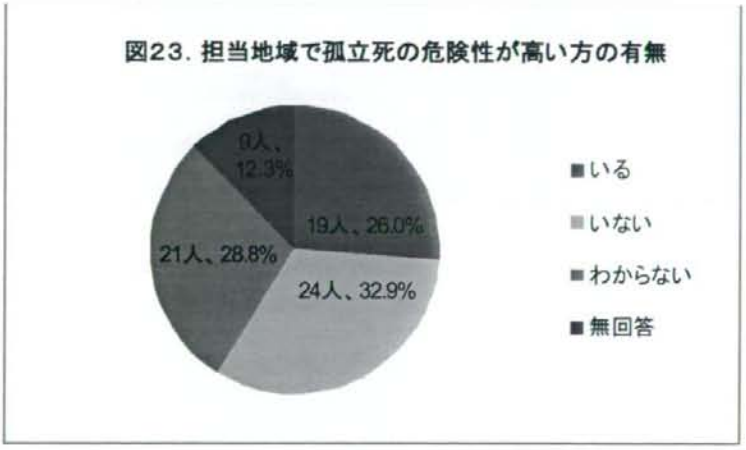
「孤立死という言葉を聞いたことがあるか」という問いに対し、「ある」と答えたものは64人（87.7%）で約9割が聞いたことがあると答えた（図22）。



(2) 担当地区で孤立死の危険性が高いと考えられる方の有無

①有無

「担当地域に孤立死する危険性が高いと考えられる方はいるか」という問いに対し、「いる」と答えたものは19人（26.0%）で「いない」と答えたものは24人（32.9%）、「わからない」は21人（28.8%）、「無回答」は9人（12.3%）であり（図23）、3割弱が危険性の高い人がいると回答している。



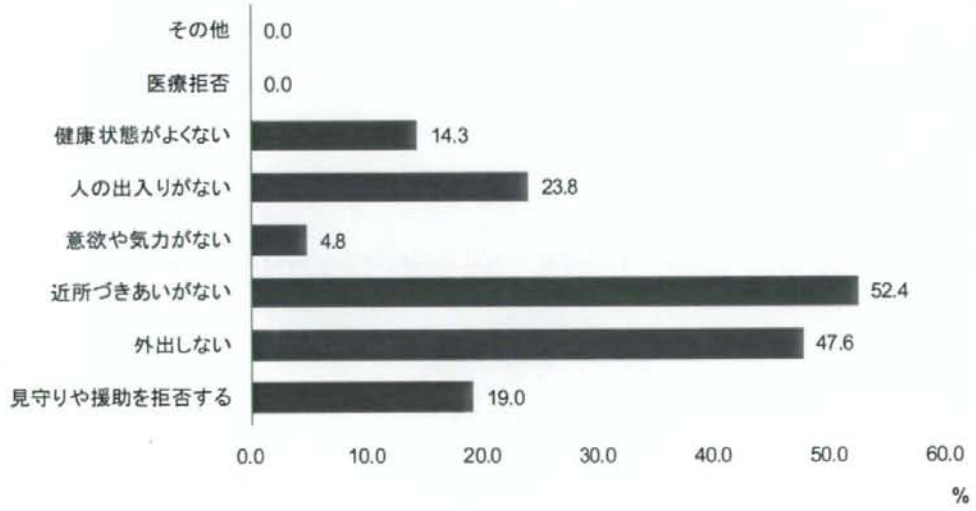
②理由

①において、孤立死の危険性が高いと思った理由として表20、図24をみると、健康状態がよくないことよりも近所付き合いがない、人の出入りがないことが孤立死のハイリスクと認識されていることがわかる。

表20. 孤立死の危険性が高いと考える理由(複数回答)

項目	人数	%
見守りや援助を拒否する	4	19.0
外出しない	10	47.6
近所づきあいがない	11	52.4
意欲や気力がない	1	4.8
人の出入りがない	5	23.8
健康状態がよくない	3	14.3
医療拒否	0	0.0
その他	0	0.0

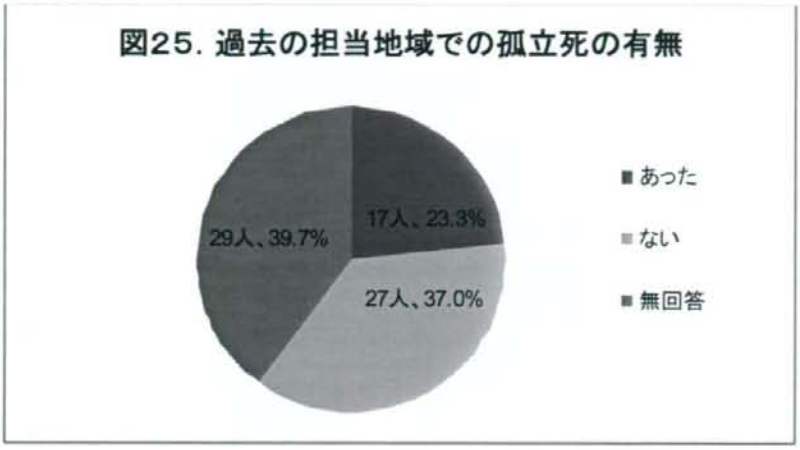
図24 孤立死の危険性が高いと考える理由(複数回答)



(3)　過去の担当地区での孤立死の有無

①孤立死の有無

「過去に担当地域で孤立死があったか」という問いに対し、「あった」と答えたものが17人（23.3%）、「ない」と答えたものが27人（37.0%）、「無回答」が29人（39.7%）であり、2割強の人が孤立死があったと回答している（図25）。



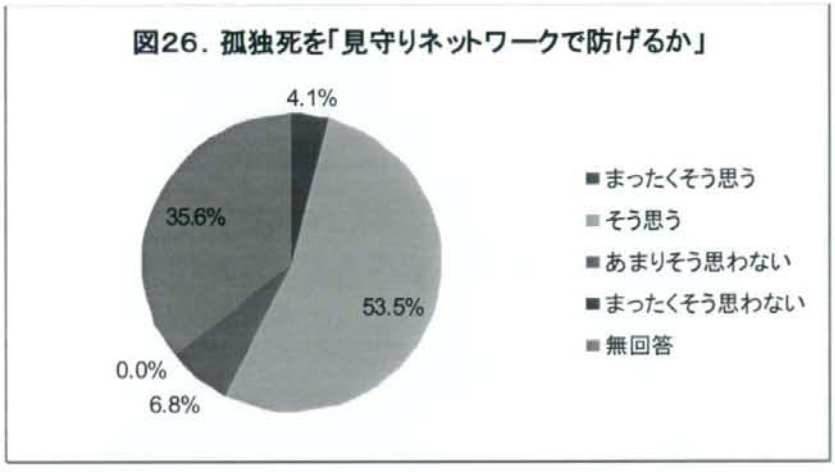
②孤立死の事例概要

地域であった孤独死事例の概要を表21に示した。

表21　地域であった孤立死事例の概要
・デイサービス通所中であったので、朝、ヘルパーに発見され対応した。
・外との関わりが少ない、家族との関わりが少ない。
・生活保護対象者で、後日行政から死亡されたとの情報があった。
・気にとめてなかった50代の男性。
・自宅訪問をしたところ、2～3日にわたって連絡が取れなかったことがあり、要援護者の方だったので、生活援護課に連絡をとって相談した。
・通報システムを持ってなく、風呂場で倒れていた。
・娘さんが2人とも嫁がれて、夫も死亡されて一人暮らしをしておられたが、風呂の中で死亡しておられた。娘さんと毎日電話で交流されていたので発見は早かった。
・数日間死亡が分からなかった。近所の人が発見。ヘルパーさんが来られ見つけた。

(4) 孤立死の見守りネットワークでの予防の可能性の有無

「孤立死を『見守りネットワーク』で防げるか」という問いに対し、「まったくそう思う」と答えたものが3人（4.1%）、「そう思う」と答えたものが39人（53.5%）で、5割強の人が見守りで防げると思っている（図26）。



(5) 孤立死を防ぐための方法の提案や意見

① 家族や本人ができること

孤立死を防ぐために家族や本人ができることは何であるかを自由回答で求めたが、本人では若い頃から家族や友人等との絆を築いておくなど自覚を持って生活すること、家族も本人との絆を築いておき、絶えず連絡を取ったり、様子を見ることなどが書かれていた（表22）。

表22 孤立死予防のために家族や本人ができること
・高齢社会に向けて個人が自覚を持って生活する。
・本人と家族の絆を若い間から相互で作っておくこと。
・やはり家族の人は頻繁に家の様子を見に行く。
・絶えず連絡を取ること、友人をつくっておくこと。

②地域でできること

孤立死を防ぐために地域でできることを自由回答で求めたが、近所や地域での日常的な交流・声かけの必要性や、連絡方法としては訪問より電話がよいことなどがあげられた。また、情報提供に関する考え方に差があり、問題を共有できないことが指摘されていた（表23）。

表23 孤立死予防のために地域でできること
・声かけ。
・隣近所の交流・声をかけ合う。
・定期的に声かけ、電話で確認が最もよい方法だと思います。
・情報の提供が皆の問題にできていない実態があるのでは？

③行政および専門機関に求める役割

孤立死を防ぐために行政や専門機関に求める役割では、情報の提供を求める声があり、特に自治会未加入者に対する住民レベルでの情報把握の限界に対しては行政からの情報提供が必要であること、そのためにも個人情報の取り扱いに関するルール作りの必要があること、さらに、見守りに対しても行政がもっと具体策を考えて欲しい等の意見が書かれていた（表24）。

表24 孤立死予防のために行政・専門機関に求める役割
・情報の提供と、取り扱いのルール作り。
・自治会に介入していない地域ではなかなか情報が得られないので、行政から「この人を見守ってやってください」等の情報が欲しい。
・定期的にパトロールをしたいが出来ない状況にあるので、行政の方で考えていただきたい。

2．見守り組織地域住民と専門職へのインタビューと質的分析

1. 目的

本章では、高齢者のセルフ・ネグレクトおよび孤立死を防ぐための地域見守り組織のありかたについて検討を行うために、見守り組織メンバーとなっている地域住民と見守り組織を支援してきた専門職へのインタビューデータを基にした質的帰納的な分析を行った。地域における見守り組織のありかたを検討する際には、それぞれの地域の住民組織体制や地域性による違いをふまえることが必要である。

本研究では、当該研究プロジェクトの対象地域のうち、見守り活動を始めたばかりの地域として堺市西区を選択し、見守り組織メンバーや見守り組織を支援してきた地域包括支援センター等の専門職がとらえている見守り対象となる高齢者の状況、見守り支援のためのテクニックや組織づくりなどを比較検討することを目的としている。なお、分析対象とした堺市は、大阪府下の都市近郊市として特徴づけられる。

2. 方法

1) 調査対象者と方法

本研究のデザインは質的帰納的研究である。

調査対象者は、見守り組織メンバーとなっている地域住民と見守り組織づくりを支援してきた地域包括支援センター等の専門職である。地域住民については 10 人、見守り組織を支援してきた専門職は12人である（表１）。なお、地域住民については、5地区を選択し、面接を実施した。

面接はインタビューガイドを用いた半構成的面接を研究者らが実施した。面接時間は約 60 分程度である。面接の形態は、個別に実施した場合とグループで実施した場合とがある。対象者の概要と面接の実施状況については、表１に示すとおりである。

インタビューガイドの内容は、大まかには「①調査対象者の知っている事例」と「②見守り支援に関する内容」とに分けられる。インタビューガイドは見守り組織の地域住民と専門職はともに、同様のものを使用した。

前者の「①調査対象者の知っている事例」については、在宅高齢者における孤立死の事例、見守りが難しい事例、見守りの必要性の有無が把握できない事例、孤立している住民をうまく援助できた事例およびできなかった事例について、できるだけ具体的に把握できるようにたずねた。

後者の「②見守り支援に関する内容」については、当該地区の見守り活動で困っていること、当該地区見守り活動や行政・専門職との連携状況、当該地区見守りで民生委員等が果たすことのできる役割と今後の課題、高齢者の孤立や孤立死防止のために行政や専門職に求める役割、見守り組織をつくるまでの今までの経緯および地域包括支援センターや住民の働きかけや役割などについて、把握することを意図してインタビューを実施した。

以上のインタビュー内容について、調査対象者の同意を得て IC レコーダー等に録音し、逐語録を作成した。なお、すべての対象者から録音の同意を得ることができた。

2) 分析

逐語録から高齢者の孤立死、見守り支援のありかたや組織づくりに関連すると思われる内容を意味毎にくぎり、可能な限り、対象者の表現を活用し、コードをつけた。さらに、コードをもとにカテゴリを作成し、さらにカテゴリをまとめて、テーマとした。これらの分析過程では、研究グループ内で数回にわたり、討議を行い、コード、カテゴリ、テーマ等の表現と分析の適切性を確保するように努めた。

表1　堺市西区におけるインタビュー対象者の概要

［見守り組織の地域住民］

面接状況	事例	性別	地域での役職
グループ面接１	N1	男性	校区福祉委員長
グループ面接１	N2	男性	民生委員長
グループ面接２	N3	男性	民生副委員長
グループ面接２	N4	男性	民生副委員長
グループ面接３	N5	男性	民生委員長
グループ面接３	N6	女性	民生委員
グループ面接４	N7	男性	民生委員長
グループ面接４	N8	女性	民生委員
グループ面接５	N9	女性	民生委員長
グループ面接５	N10	女性	民生委員

［介護保険事業者・行政機関］

面接状況	事例	性別	職種
グループ面接１	N1	男性	デイサービス 職員
グループ面接１	N2	女性	特別養護老人ホーム職員
グループ面接２	N3	男性	グループホーム管理者
グループ面接２	N4	女性	グループホーム（看護師）
グループ面接３	N5	男性	居宅介護支援事業者 職員
グループ面接３	N6	女性	在宅介護支援センター 職員
個人面接１	N7	男性	保健センター（精神保健相談員）
個人面接２	N8	女性	ケアハウス職員
個人面接３	N9	男性	市役所（福祉担当職員）

［地域包括支援センター職員］

面接状況	事例	性別	職種
個人面接１	N10	男性	社会福祉士
個人面接２	N11	女性	社会福祉士、精神保健福祉士
個人面接３	N12	女性	看護師、主任ケアマネジャー

3) 倫理的配慮

調査対象者には書面と口頭で本研究の趣旨、目的と方法を説明し、対象者から文書にて同意を得た。また、調査協力は自由意思に基づくものであり、いつでも中止可能であること、研究目的以外では得られたデータを使用しないことを説明した。なお、本研究は、甲南女子大学看護リハビリテーション学部研究倫理委員会から承認をうけて実施している。

3. 結果

1) 見守り組織の地域住民へのインタビューの質的分析結果

地域住民へのインタビューから得られた質的分析についてのテーマとカテゴリを表 2-1、表 2-2 ～ 4 に示す。

表２－１　見守り住民に対する面接から得られた質的分析の概要

テーマ	カテゴリ
孤立死のとらえ方	自分の地域では孤立死はおこらない 連携が取れていないところに、孤立化、孤立死はある（新興住宅、文化住宅、市営住宅、共同住宅）
孤立死発見のプロセス	見守りのために訪問したら独りで亡くなっていた 団地内で、部屋の鍵も閉まっていて「変な臭いがする」という通報があった
見守り対象となる高齢者	人に頼ろうとしない高齢者 人とのつながりを拒否する高齢者 人との交流が少ない独居の男性高齢者 地域とのつながりが少ない集合住宅に住む高齢者 近所づきあいから孤立している高齢者 集まりに誘っても反応しない高齢者 家族関係の問題が多い高齢者 認知機能低下による行動障害がある高齢者 食事をしていない高齢者 独居で身寄りがいない 高齢の夫婦２人世帯で、一方の体調が悪い 精神疾患症状がある 難病がある 貧困金銭の問題がある

表２－２　見守り住民に対する面接から得られた質的分析の概要

テーマ	カテゴリ
見守りのための テクニック	対象者のニーズに応える 見守りの訪問より、サロンを勧める方がとっかかりやすい 対象者には見守りからかかわり始める 既存のサービスを使って、安否確認をする 見守りを行うための対象者への働きかけ 変化があれば声をかける 用はなくても近くに行き声をかける 対象者の情報を把握しておく 相手の気持ちに立ち入りすぎないで、見守る 情報提供をしている 見守り頻度は月2回 長い支援の積み重ねにより関係づくりができる 必要な措置を執る（連携する） 同居していない家族の協力を得る 家族とのつなぎになる

表２－３　見守り住民に対する面接から得られた質的分析の概要

テーマ	カテゴリ
見守り困難な点	個人情報が入手できない 家の中まで入り込むことが難しい 誰が見守り対象者かわからない 区長との情報共有が難しい 集合住宅は情報把握が困難 やる気のある担い手がいない いろいろな意見を持っている人がおり、地域活動が困難 システムが使えない 個人情報 民生委員のマイナスイメージ 支援や介入の拒否

表２－４　見守り住民に対する面接から得られた質的分析の概要

テーマ	カテゴリ
見守りのための組織作り	既存組織があり、見守りに活用しやすい 行政と連携をとる必要がある 住民組織間で情報を共有する 地域包括支援センターは連携しやすい 地域包括支援センターと情報を共有したい 民生委員の職務は見守り 民生委員の職務に協力してもらう 見守りをシステム化する 組織づくりの核が大切 地域の絆の強さ 近隣住民が気にかけてくれる 近隣住民や子どもが見守るべき 近所同士で助け合いたい 地域の医療施設との連携 行政と専門職の知識とレベルの向上の必要性 担当者の変更を極力減らす努力 地域住民の認知症などの理解の向上が必要 貧困者が使用できるサービスの構築 サポートしている人の思いをくむ仕組みが必要 介護報酬の低さはサービスの質を落とす 活動における課題、今後必要な支援内容 実際にあるネットワーク

（１）孤独死のとらえ方

テーマ「孤独死のとらえ方」に関するカテゴリとコードの一覧については表３に示す。

表３　テーマ「孤独死のとらえ方」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ･コード
孤立死のとらえ方	自分の地域では孤立死はおこらない 私の知っている限り、孤立死はない。 連携が取れていないところに、孤立化、孤立死はある（新興住宅、文化住宅、市営住宅、共同住宅）

（2）孤独死発見のプロセス

テーマ「孤独死発見のプロセス」に関するカテゴリとコードの一覧については表4に示す。

表4　テーマ「孤独死発見のプロセス」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ・コード
孤立死発見のプロセス	**見守りのために訪問したら独りで亡くなっていた** ヘルパーが発見“見守りのため”の訪問かは不明。 **団地内で、部屋の鍵も閉まっていて「変な臭いがする」という通報があった**

（3）見守り対象となる高齢者

テーマ「見守り対象となる高齢者」に関するカテゴリとコードの一覧については表5に示す。

表5　テーマ「見守り対象となる高齢者」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ・コード
見守り対象となる高齢者	**人に頼ろうとしない高齢者** 高齢者は遠慮があり、人に頼むことができない。 「民生の手にはかからん」と言って訪問を拒否する。 息子など訪ねる回数が少ない。 **人とのつながりを拒否する高齢者** 家族や他人とのつながりを拒否する奇人変人が、孤立死しやすい。 神様を信じている。 **人との交流が少ない独居の男性高齢者** 男性の一人暮らし。 **地域とのつながりが少ない集合住宅に住む高齢者** マンションや団地は独居が多い。 核家族化などによる。 **近所づきあいから孤立している高齢者** トラブルメーカーは孤立しやすい。 隣組制度崩壊による。 孤立死する人・孤立する人は地域と仲良くしていない。 体が不自由で外出できないということもある。 古くからの住民でなく他の地区から引っ越してきた人。 ちょっと変わった風に見られている。 **集まりに誘っても反応しない高齢者** 集まってくる方は元気な方ばかりでそこに入れない人をどうするか。 反応のない方は閉じこもっている方が多い。 個人情報を勘違いしている人もいて難しい。

テーマ「見守り対象となる高齢者」に関するカテゴリおよびコード一覧（つづき）

テーマ	カテゴリ・コード
見守り対象となる高齢者	家族から疎外されている人も気をつけていかないといけない。 家族に精神疾患や難病の人がいる。 家族が閉じ込めている。 ２世帯住宅の１階に高齢者が住んでいるが、２階の家族は何も知らないことがありえる。 **認知機能低下による行動障害がある高齢者** 徘徊する人。 ものとられ妄想で家族に暴力をふるう人。 寂しくなったら緊急ベルで救急車を呼ぶ。 **食事をしていない高齢者** 食べていない人は気になる。 **独居で身寄りがいない** **高齢の夫婦２人世帯で、一方の体調が悪い** **精神疾患症状がある** **難病がある** **貧困金銭の問題がある** 介護保険料滞納、年金の前借りをしている。 制度だけで救うことができない。

（４）見守りためのテクニック

テーマ「見守りのためのテクニック」に関するカテゴリとコードの一覧については表６に示す。

表６　テーマ「見守りのためのテクニック」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ・コード
見守りのためのテクニック	**対象者のニーズに応える** 何かあったら電話してや、と言ってある。 一緒に病院や買い物に行って空腹と脱水の改善を図った。 3，４日の関わりで改善。 **見守りの訪問より、サロンを勧める方がとっかかりやすい** 会食会やサロンで見守る。 サロンに出て周囲の人と話せるようになった。 独居の高齢者も福祉のサービスを受けてもらう。 ヘルパーや民生委員や少しでも多くの人が1人暮らしの高齢者と関わり見守る。 **対象者には見守りからかかわり始める** 基本的に対象者には見守りから入る。

テーマ「見守りのためのテクニック」に関するカテゴリおよびコード一覧（つづき）

テーマ	カテゴリ・コード
見守りのための テクニック	独居者へのあんしんシステムの周知。 孤立死防止のために、新聞・ヤクルトを取っているかチェック。 新聞配達の人から引っ越ししたなどの情報を得るなど、情報源として貴重な戦力になっている。 民生委員に推薦状を書いてもらうことで、緊急通報サービスを無料で設置してもらう。 **見守りを行うための対象者への働きかけ** きっかけ作りに年末にお餅台を持っていき、留守の時はポストにメモを入れる。 頻回に声かけする努力をする。 人間関係を大事にし、こつこつ積み上げていくことが大事。 堺市全体として「お元気ですか声かけ活動」を行っている。 民生委員ではなく「校区の福祉委員」と言うと受け入れてもらえる。 **変化があれば声をかける** いつも電話に出る人が出なかったら声かけ訪問を行う。 **用はなくても近くに行き声をかける** 体調が悪くなった時には気弱になって、他者が関わって行くことになるのでそれをきっかけにする。 **対象者の情報を把握しておく** かかりつけ医の情報を把握しておく。 「災害時一人の見逃し者もなし」という運動を展開している。 （災害時のみの使用となるが）対象者を重度ごとに区分けをして“この地域には重度の人が何人いる”ということがわかる地図を作成した。 災害カード・支援カードの作成。 **相手の気持ちに立ち入りすぎないで、見守る** 声をかける。そっとしておく。その加減というのが相手に対する思いやり。 **情報提供をしている** 「こういうシステムありますよ」と言っても、お年寄りは全部見落としている。 「困ったときはここに連絡して」という情報を、派手な色紙に印刷し、声かけ時に毎月配布している。 **見守り頻度は月2回** 見守りは月1回から2回。 外出ができない方には毎月1回電話の安否確認。 **長い支援の積み重ねにより関係づくりができる** 地域での活動を続けて声をかけてもらったり顔を覚えてもらったりする。 **必要な措置を執る（連携する）** 保健センターが緊急で精神科に強制入院させた。 病院の協力で入院した。

テーマ「見守りのためのテクニック」に関するカテゴリおよびコード一覧（つづき）

テーマ	カテゴリ・コード
見守りのための テクニック	**同居していない家族の協力を得る** 一回見に来てもらう。 一緒に考えてもらう。 家族の思いにも配慮する。 **家族とのつなぎになる** 同居家族と外の家族を第三者的に関わり、介入する。 家族に状況を正しく伝える。

（5）見守り困難な点

テーマ「見守り困難な点」に関するカテゴリとコードの一覧については表7に示す。

表7　テーマ「見守り困難な点」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ・コード
見守り困難な点	**個人情報が入手できない** 守秘義務の壁があり、情報を入手できない。 どこにだれが住んでいるかの情報が欲しい。 老人会や自治会と協力をし、敬老の日に品物と引きかえに書いた住所を元に見回りに行く。 身障者や精神障害者の情報が無く、見回り対象で抜けているところである。 情報を入手できないことが声かけを難しくしている。 住んでいるのが本人でなく弟であった。 独居高齢者が外出などの情報を周囲に知らせず、家を空け **家の中まで入り込むことが難しい** 家を訪ねても寝たままで起きて喜んでくれるわけでもない。 訪問を拒否をする。 隣人も、日頃から連絡がとれていない。 隣に声はかけるが、踏み込むのは失礼という風土がある。 一戸建ての人に、地元との関わりを持ちたくないという意識の人が多い。

表7　テーマ「見守り困難な点」に関するカテゴリおよびコード一覧（つづき）

テーマ	カテゴリ・コード
見守り困難な点	**誰が見守り対象者かわからない** 気になる人がみえていない。 本当に困っている人の実態が見えてこない。 自治会に入っていない人は名簿に載らないため、漏れる可能性がある。 **区長との情報共有が難しい** 名簿は民生委員が個人で作る。 **集合住宅は情報把握が困難** マンションだと把握しづらい。 **やる気のある担い手がいない** 次の世代を育成することからが課題。 給食サービスに携わっている人達が高齢化してきている。 近所に協力してくれる人がいない。 若者が引っ越してきた場合、交流がなく協力も得られない。 **いろいろな意見を持っている人がおり、地域活動が困難** マンションの管理組合にお金を払っているから、お金を払ってまで自治会に入らない。 自治会には入らず、地域の情報だけ必要とすることもある。 **システムが使えない** ＮＴＴ回線でない人が増えて警報システムが使えない。 **個人情報** 個人情報が周囲に広まり、人権問題でなく様々な問題に発展しかねない。 自分が民生委員であると情報収集時に容易に言えない。 個人情報という言葉が先走りしている。 **民生委員のマイナスイメージ** 「私は民生委員ですが」といって道を尋ねたら「あそこの家は保護をうけているのか」と言われた。 民生委員と聞くだけで嫌な顔をされた。 **支援や介入の拒否** 遠くに住んでいる子供が、民生委員の訪問を拒否する。 男性や健康状態の良い人は民生委員などの関わりを拒否す

（6）見守りのための組織作り

テーマ「見守りのための組織作り」に関するカテゴリとコードの一覧については表８に示す。

表8　テーマ「見守りのための組織作り」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	カテゴリ･コード
見守りのための組織作り	**既存組織があり、見守りに活用しやすい** 専門職の話を聞いたり、アドバイスをもらえることが会議のメリット。 横の連携がとれる。 **行政と連携をとる必要がある** 行政への要望として情報共有し、「うちは知らん」と言わないで欲しい。 行政からの説明が不十分。 役所が閉まっている土日祝の機能と連携の必要性。 役所と地域在介と窓口を一つにしてお互い連携したい。 包括支援センターは人数が少ないため、民生委員が地域内でチェックする必要のある人を行政に連絡する。 行政には素早い対応と的確なアドバイスをして欲しい。 いきいきサロンなどの集まりに車の送迎をして欲しい。 金銭的な補助をして欲しい。 緊急通報システムの申請から使用できるようになるまでの日数を短縮化して欲しい。 民生委員は地域の実態を全部把握し、行政担当者に報告しているので、専門的に対応してもらいたい。 行政がもっと地域の中へ来て、現状判断をして欲しい。 行政がもっと高齢者や各組織に情報提供し、コーディネートもして欲しい。 見守り活動をする人にも一定の肩書を作ると、活動しやす **住民組織間で情報を共有する** 何かあったら議事録を回覧版で回す。 町会内での連携。 見守りケースの周知をし、情報を共有する。 区長から地図をもらって、色分けをする。 自治体と民生委員とが情報共有している。 **地域包括支援センターは連携しやすい** 包括はすぐ動いてくれるのでありがたい。 **地域包括支援センターと情報を共有したい** 住民や包括のそれぞれ知っている情報をすりあわせるのが重要。 情報を公開してもらえればこちら側も「こういう制度がある」と深い働きかけができる。

テーマ「見守りのための組織作り」に関するカテゴリおよびコード一覧（つづき）

テーマ	カテゴリ・コード
見守りのための組織作り	**民生委員の職務は見守り** 民生委員の連絡で見守りができた例が複数ある。 現在行っている活動は見守り、訪問と電話による安否確認。 **民生委員の職務に協力してもらう** 民生委員のサブが欲しい。 民生委員の業務内容が多すぎる。 **見守りをシステム化する** 物事を進める時は、目標・目的を明確にし、プロセスを踏まえて行う。 民生委員の役割が不明確で、ある程度線引きが必要。 **組織づくりの核が大切** ネットワーク作りは民生委員がする。 ネットワーク作りは民生委員単独ではなく、地域の他の組織と連携しないとうまくいかない。 **地域の絆の強さ** 一戸建てで一軒の面積が広いため、隣とのつながりがない。 **近隣住民が気にかけてくれる** 「みんな元気？どうしているんやろ」とお互い気にしている。 ボランティアだけでなく、隣近所の人に協力してもらって見守ってもらう。 近隣の関わりの積み重ねが大切。 少しも見かけない、電気がついていないという情報だけでもあがってくるようなネットワークが作れたらよい。 **近隣住民や子どもが見守るべき** 役所よりも、近所の住民が見守るべき。 **近所同士で助け合いたい** 近所同士助け合うという関係はもった方がよい。 **地域（医療）施設との連携** 病院から連絡があった。 **行政と専門職の知識とレベルの向上の必要性** 虐待など高度な対応が必要。「かもしれない」と思う事が大切。 **担当者の変更を極力減らす努力** 担当者が変わると大変。利用者にとっては、組織ではなく担当者の「その人」である。 担当者同士の人と人とのつながりが大切。 **地域住民の認知症などの理解の向上が必要** **貧困者が使用できるサービスの構築** **サポートしている人の思いをくむ仕組みが必要** サポートした人が心残りを持っている。 説明しても認識できているか不安に思う。 **介護報酬の低さはサービスの質を落とす**

テーマ「見守りのための組織作り」に関するカテゴリおよびコード一覧（つづき）

テーマ	カテゴリ・コード
見守りのための組織作り	**活動における課題、今後必要な支援内容** 安否確認、声かけの頻度をあげる。 周囲（近所、新聞屋、牛乳屋、ヤクルト、警察、企業、ヘルパーなど）を巻き込んだ網の目のようなネットワーク作りが必要。 ネットワーク作りの指導的な役割ができればと思う。 ネットワーク作りでどこが主導するのか、諸団体の思いと利害を一本化させるのが難しい。 地域主導は困難 法律が解り、資金繰りができる行政（または研究者などの専門家）主導のネットワーク作りや問題への取り組みが必要。 **実際にあるネットワーク** 自治会、婦人会、民生委員、赤十字奉仕団の4団体が行政主導で自主防災活動を行っている。